羅府新報

(6)　2016年（平成28年）　9月1日（木曜日）

南加キリスト教教会連合

義姉の受洗

岩田　春子

今年の1月、義姉が肝臓がんで余命6カ月という知らせを聞き、非常にびっくりした。わが兄は胃がんで若くして亡くなった。当時オレゴンの神学校の学生であった私は、兄の魂の救いのため、兄の入院していた東大病院へ駆けつけた。兄はやせ細って見る影もなくなっていたが、しっかりした澄んだ眼差しで私を見つめ主を受け入れ洗礼を受けた。当時義姉の千代も私が兄に語り聞かせていた「悔い改め」（あなた方も悔い改めなければ、皆同じように滅びるであろう。聖書ルカ13：5）、「罪の赦し」（悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪の赦しを得るために、イエスキリストの名によって、バプテスマを受けなさい。使徒行伝2：38）、「永遠の命」（御子『キリスト』を信じる者は、永遠の命を持つ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上に留まるのである。ヨハネ3：36）、聖書のみ言葉を兄のベッドの傍で、ジーと聞いていた。

その義姉がこの世での最後の6カ月が来た事を知り、居ても立っても居られなくなり、わが故郷の沖縄へ飛んで帰りたくなった。だが私の健康状態は普通ではなかった。7年間の腎臓透析、3年前に移植、その後シンゴルズ病（大人の麻疹）、去年9月槽骨病で首を手術。義姉のお見舞いなどへ、とても行ける状態ではなかったが、何となく行けそうな気がしたので4月に飛行機の予約を取ってしまったのだがその後、大雨にぬれ、風邪を引いてしまい咳が止まらず苦しくて唸っていたので、救急処置所へ運ばれて行った。右肺に痰がたまっているということで即、強制入院。食事は喉を通らず、毎日採血され体は衰弱し、酸素ボンベで呼吸を調節し、これ以上悪くなれば命に関わると医者に言われ、私はイエスキリストを信じ永遠の命が在るので、いつ死んでもかまわないが千代姉をそのままほっておいて死なせたら、天国へ先立った兄にぶん殴られるに違いないと思った。

というのは、兄は健康の時、会社を経営していて、将来私に会社経営を手伝わせるつもりだったらしい。私が本格的にクリスチャンになり、神学校へ行くのを知った兄は、「頼むから神学校へ行くのをやめてくれ、兄さんの傍に居てくれ、君の欲しい物はすべて与えよう、大金持ちの結婚相手も考えてある」と土下座して私に乞うた。その時私は胸が張り裂けそうなほど痛み、即座に「この体を半分はキリストに、半分はお兄さんに差し上げたい！」と言うや否や、大

きな手のひらがとび出して来て、私の顔を思い切りぶん殴ったのである。私の方は、「裏切り者の私を赦して下さい」とボロボロ泣きながら「すみません、すみません」と心で叫びつつ、「でもいつか必ずどんな事があってもあなたをキリストへ導きますから…」

肺炎で入院してもう9日が経っていた。医者にいつ退院出来るのかと聞くと、「いつになるか分からない、治る迄ここに居なさい」と。私は、「とんでもない、義姉はもうすぐ死ぬのです。私は直らなくてもかまいません、飛行機切符も準備してあるので、あなたが何と言おうが私は夜中に出て行きます」医者はむっとして、「今退院してもこの状態だとすぐに戻って来るでしょう」と言って去って行ったが大急ぎで退院手続をしてくれ、翌日退院させてくれた。家へ帰って安堵し、やっぱり家は何よりだとホットしたのもつかの間、下痢、目まい、呼吸困難に陥り、やはり医者は正しかった、様子を見て病院へ戻ろうかなと思案しつつ日々を過ごしている内に少しずつ良くなって来た。

飛行機を6月に延期し義姉への伝道を準備しつつ、現実は義姉より先に自分が息を引き取り、かえって皆に迷惑を掛けるのではないかと思ったり、果たして長時間飛行機に乗っていられるのかと不安が募って来た。病院で医者を相手に勇敢にしゃべっていたあの私は今は何処へ…と思いつつ6月6日機上に登った。

12年ぶりに故郷の土を踏み、訛や、方言、ブロークン英語を耳にしていると面白おかしくて自分が病気であることをすっかり忘れてしまっていた。すぐに千代姉の病室を探して行った。姉は私が来るのを首を長くして待っていて、私の健康を心配し、「今日は疲れているでしょう。遠いアメリカからわざわざ来てくれて有り難う。早くホテルへ帰り寝なさい、無理しないでね」と。彼女が思ったより元気だったので内心ホットした。

2日後、姉は心の準備をして待っていてくれた。キリストが十字架上で私たちの罪の身代わりの死を遂げられた事、キリストは殺されたが、3日目に甦られ天に帰られまた迎えに来られる事などを話すととても素直に頷き、主を彼女の救い主として受け入れ、大声で聖書を読み、讃美し喜んで洗礼を受けた。「千代姉さんの名が永遠の命の国籍に載ったので天国では今、大きな祝宴が催されているのです」と言うとしばらく天を見つめていた。次は聖餐式を受けさせに行った。いつものようにニコニコし、顔もいっそう透き通り清らかな感じがした。

家族、親戚、親友、教友たちは私の突然の帰郷に驚き、特に義姉の受洗を心から大喜びしてくれた。義姉の元気な姿を見て、きっとまだまだ長生きするに違いないと思いつつLAへの帰路を急いだ。だが私がLAへ帰って来てまもなく義姉は天国へと旅立った。「私は道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。ヨハネ14：6」

（サンライズ教会牧師）